

日本薬学生連盟
OBOOG訪問

「このまま薬剤師になっていいのかな」 薬学生が始めた“薬育活動”

日本薬学生連盟に入会することを決意する理由の中で一番多いのは何だろうか。「先輩に憧れて」——。私自身も数年前、輝いていた先輩方に憧れて、日本薬学生連盟の門をくぐった。そこから学生生活が180度変わったことは言うまでもない。今回は、そんな私の学生生活を、ひいては人生を大きく変えてくれた一人の先輩。病院薬剤師として活躍する小路晃平さんに話を聞いた。先輩たちが輝く根源がここにあったように感じる(2017年度代表=小池雄悟、立命館大学5年)

病院薬剤師 小路 晃平さん

国際会議で外向き活動に衝撃

薬剤師体験でゲームを考案

——小路さんの学生時代について教えてください。

私が薬剤師を目指したきっかけは、実家の商店に薬を置いてはどうかと言った父の言葉からでした。実家は100年続く商店で、日用雑貨を販売しています。地域の方は、困ったことがあれば父を頼って来て下さいます。私は活躍する父の背中をいつも見てきました。そこに薬を置けば、さらに地域の方の力になれるのではないか、そう思い薬学部に入学しました。

とはいえ、近親者に薬剤師がいるわけでもなく、漠然とした理想像を持っているだけでした。そんな私の学生生活を変えたのは、早期体験学習の病院見学でした。私が病院で見たかったのは、患者に関わる薬剤師の姿だったのですが、1年生の集団相手に見せてもらったのは調剤室や無菌調剤室で黙々と働く薬剤師の姿だけでした。

そこで私は、理想と現実のギャップを感じるようになりました。今振り返

ると私の視野が狭く、知識がなかったからそう感じてしまったのだと思います。しかし、そんな「このまま薬剤師になっていいのかな」という不安が私を突き動かす原動力となりました。早期体験学習の後、医療について語り合える場として医療系サークルを立ち上げました。

さらに、他大学とのつながりを作るために、薬学生の集い(日本薬学生連盟の前身団体)に加盟し、全国で活動するようになりました。次に私の学生生活を変えたのは、タイで開催されたIPSF(国際薬学生連盟)の世界会議でした。他国の学生と話したとき、学生が考案した禁煙推進運動や糖尿病啓発運動を地域で行っていることを知りました。

それまでの私の知る国内の活動といえば、学生を対象に行っている勉強会や講演会などの“内向き”の活動でした。しかし他国では、地域の方を対象にした“外向き”の活動をしていること

に衝撃を受けました。その後、私がはじめに行ったのは献血推進運動でした。取り組んだ理由は、10歳代、20歳代の献血者数が少ないことが問題になっていますが、献血者数の少ない世代と同世代であることや、血液製剤を取り扱う薬剤師にとって身近な活動であり、薬剤師を目指す私たちが献血を推進することに意味があると感じたからです。

この活動を通して、“外向き”の活動の意義を体感するとともに、活動を行うための運営についても大きなヒントを得ることができました。他にも、WHO等が定める国際デーにちなんで、薬物乱用防止運動や禁煙推進運動、糖尿病の啓発活動などを行ってきました。そのような活動をする中で、世間の「薬剤師不要論」を唱える声を耳にすることがあり、世間の方に薬剤師の専門性が知られていないことを思い知

らされました。IPSFでもPPAC(Pharmacy Profession Awareness Campaign: 薬剤師専門性認知向上運動)という活動が世界各地で行われていました。ポスターを使って啓発を行うことをはじめ、デモ行進をしている国があれば、薬剤師体験をしている国もありました。私は大学の学祭の模擬店で地域の方、特に児童に薬剤師体験をしてもらおうと思いました。せっかくであれば、調剤という手法を体験してもらうのではなく、薬の効果や副作用を評価する薬物治療を体験してもらえないかと考えました。

そこで、考えたのが“天秤ゲーム”です。病気の模型の重さと同じ重さの薬をカプセル集め、薬効を血中濃度の天秤で測定するというものです。薬が少ないと病気に傾き、赤のゾーンに入り



薬育について熱く語る小路さん

あなたの、
かかりつけ薬局へ。

あなたに寄り添い、健康をささえる
“いつもの窓口”になります。

 阪神調剤ホールディング株式会社

人とつながりを大切に、みなさまを笑顔にします。

<http://www.hanshin.holdings/> 阪神調剤ホールディング 検索